

住居観に関する研究

その4、住居観と居住歴の関連

中 島 喜代子

Studies on the View of Dwelling House and Home Life

Part 4, The Relation between the View of Dwelling House and Home Life, and Residential History

Kiyoko NAKAJIMA

1. 緒 論

住居観は、直接的には住経験に現制されると考えられる。住経験には、図1に示すように、体験的経験と知識的・認知的経験とが考えられる。体験的経験は、長期的・恒常的には住むことと関連し、居住歴として表現されるものであり、住みかえの歴史である。これが主に、住居観の形成・変容に関わっていると考えられる。また、特に住居観形成に大きなウェイトを占めると考えられる成長過程における家庭での居住歴を家庭環境歴として区別してとらえられよう。さらに、居住者の住生活に関係なく起こる突発的・急変的出来事は、住に関するエポックとして持続的・断続的な住居観を短期間に変化させる場合もある。

一方、知識的・認知的体験として住学習・鑑賞などがあり、これは主に断続的・個人的に経験するものであるが、継続的・組織的に経験するものとして住民運動への参加が考えられる。後者は、部分的には知識的・認知的経験の側面をもつとともに、体験的経験の側面をも有するといえる。住居観は、これらの知識的・認知的経験によっても影響を与えられることがある。

本報では、住経験のうち、長期的・恒常的な体験的経験である居住歴について、住居観との関連を検討する。居住歴は、一方では住居観を形成する要因になると同時に、一方ではそうして形成された住居観によって逆に新しい居住歴が作られて行き、それ

がまた住居観を形成あるいは変容させる要因になって働くという連環構造にあると考えられる。

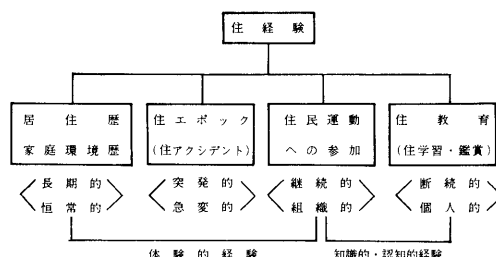


図1 住 経 験 の 分 類

分析の視点として、①まず、居住歴のうちでどの側面が住居観に影響を与えるのかを検討する。本報で取りあげるのは、居住地域の性格、居住地域への定着性、住宅の質的側面、住宅の面積的規模の側面である。②次に、夫と妻の間に、住居観形成に影響を受ける側面に違いがあるか、また影響度に違いがあるかについて検討するため、夫婦別に分析する。③さらに、結婚前・後の居住歴において、どちらにより影響を受けるのかについても検討を加える。結婚前の居住歴はほとんど居住者の志向が反映されたものではなく、居住者の住意識の形成に関わるほぼ純粋な影響要因としてとらえられるが、結婚後の居住歴は、一方では居住者が選択した居住者の住意識の反映の結果でもあり、逆にそれが居住者の住意識を形成あるいは変容させる影響要因ともなっている。

その点で、結婚前と結婚後の居住歴は、区別して検討する必要があると考える。

2. 調査の方法

調査は、本研究その3に示したものと同一であり、農業地、および市街地（住宅地、商業地、工業地の全用途地域を含む）の小・中学生をもつ父母各956件の調査対象である。

調査対象が居住する住宅は、約 $\frac{3}{4}$ が持家、約 $\frac{2}{3}$ が専用住宅、約 $\frac{4}{5}$ が一戸建建であった。また、拡大家族の比率、平均家族人数とも多く、職業分布にも特定の職業に大きな片寄りはみられなかった。

住居観の分析については、その3で統計的に抽出した4つの住居観パターンを用いて検討する。ちなみに、その4つの住居観パターンは、「合理型類型」（夫326件・34.1%、妻391件・40.9%）、「誇示型類型」（夫370件・38.7%、妻347件・36.3%）、「自律型類型」（夫181件・18.9%、妻138件・14.4%）、「慣習型類型」（夫79件・8.3%、妻80件・8.4%）であった。

3. 調査結果と考察

1)、居住地に対する居住歴と住居観の関連

居住地については、実家、現住宅、結婚前・後の経験の有無別に、その用途地域的性格をとらえ、居住地域への定着性の側面から、現住宅と出身地との地理的遠近関係と結婚後の転居回数を取りあげ、住居観との関連を検討する。

(1)居住地の用途地域性格と住居観の関連

妻・夫別、住居観類型別に、実家における居住地の用途地域に対する割合を図2に示す。妻・夫ともに、農・漁業地の割合が一番多くを占めている。住居観パターン別にみると χ^2 検定に10%水準までの有意差はないが、「自律型類型」の妻・夫ともに、農業地の割合が少なく、住宅地、商業地の割合が多い。

同様に、現在居住している住宅（以後現住宅と記す）の用途地域と住居観パターンの関連を図3に示す。全体的に、実家より住宅地の割合が多く、農業地の割合が少なくなっている。住居観パターン別にみると、「自律型類型」の妻・夫ともに他パターンより農業地の割合が少なく、妻では住宅地、夫では商業地の割合が多い（夫では χ^2 検定10%水準で有意差あり）。

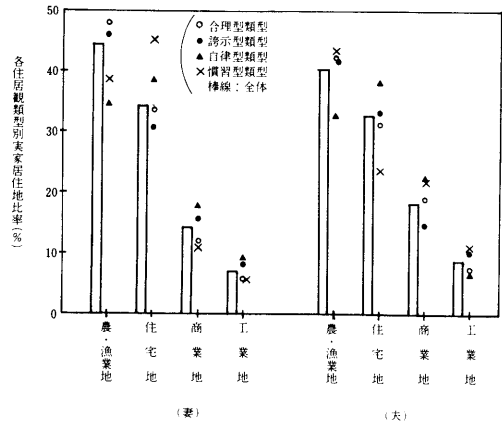
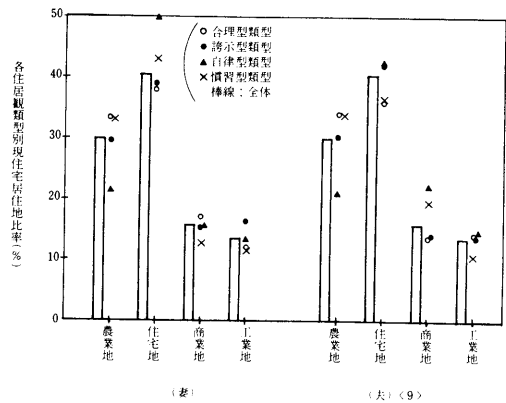


図2 妻・夫別住居観類型と実家の居住地の関連



()内の数字は χ^2 検定による有意差(%)

図3 妻・夫別住居観類型と現住宅の居住地の関連

次に、各用途地域別に居住経験の有無を、結婚前後とも経験あり（以後、「前後ともあり」と記す）、ともに経験なし（以後、「前後ともなし」と記す）、結婚前のみ経験あり（以後、「前のみあり」と記す）、結婚後のみ経験あり（以後、「後のみあり」と記す）の4経験に分類し、各住居観パターンとの関連を図4、図5に示す。農・漁業地に対する居住経験では、「自律型類型」の妻・夫ともに「前後ともあり」の割合が少なく、「前後ともなし」の割合が多い。住宅地に対する居住経験は、「自律型類型」の妻・夫ともに「前後ともなし」の割合は少ないが、特に妻の方に顕著である（妻は χ^2 検定1%水準で有意差あり）。

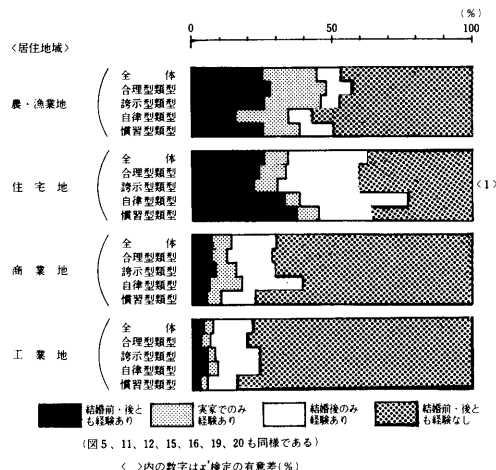


図4 住居観類型と結婚前・後の居住地に対する経験の関連（妻）

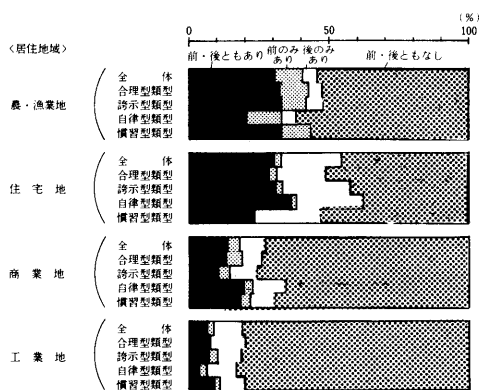


図5 住居観類型と結婚前・後の居住地に対する経験の関連（夫）

(2) 居住地の移動（定着性）と住居観の関連

a、出身地から現住宅への移動（遠隔度）

現住宅と出身地との地理的遠近関係を、実家と現住宅が同一住宅である場合（以後、同一住宅と記す）、実家と現住宅が同一市町村内にある場合（以後、同一市町村と記す）、実家と現住宅が同一県内にある場合（以後、同一県内と記す）、実家と現住宅が同一県内にない場合（以後、同一県外と記す）の4段階に分類し、これと住居観パターンとの関連を図6に示す。妻と夫を比較すると、夫では「同一住宅」の割合が多く、「同一県内」、「同一県外」の割合は妻より少なくなっており、地域的移動距離は短かく、定着性が強いといえる。

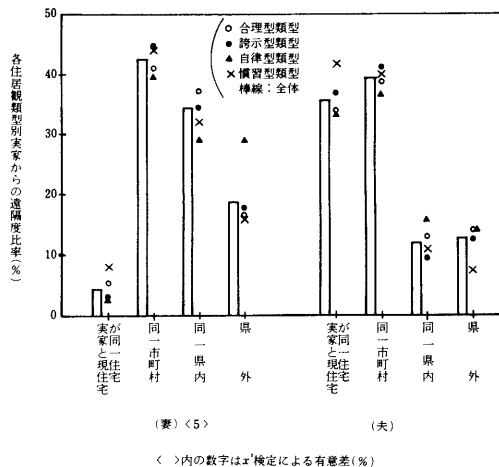


図6 妻・夫別住居観類型と実家からの遠隔度の関連

住居観パターン別にみると、「慣習型類型」では、「同一住宅」、「同一市町村」の割合がやや他パターンより多く、出身地からの遠隔度は小さい。逆に、「自律型類型」では、妻・夫ともにその割合が少なく、出身地からの遠隔度は大きい。この傾向は妻でより顕著であり、特に「同一県外」の割合が多い（妻では χ^2 検定5%で有意差あり）。

b、結婚後の転居回数

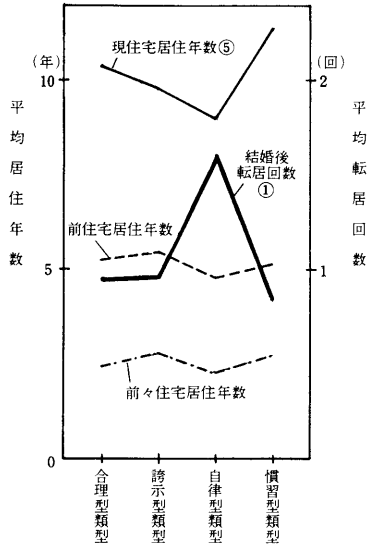
居住地への定着性は、住宅の転居回数と居住年数で表現される。結婚後の平均転居回数と、現住宅および現住宅に居住する直前の住宅（以後、前住宅と記す）、前住宅に居住する直前の住宅（以後、前々住宅と記す）における平均居住年数を、住居観パターン別に、図7、8に示し、結婚後の居住地に対する定着性を検討する。

結婚してから現住宅に居住するまでの平均転居回数は、「自律型類型」において、妻・夫ともに多く（平均値の差の検定は妻で1%、夫で5%水準で有意差あり）、その傾向は妻においてより顕著である。これは、「自律型類型」において、現住宅における平均居住年数が、妻・夫ともに短いことにも現われており（妻では平均値の差の検定5%水準で有意差あり）、居住地に対する定着性は弱い。

2、住宅の質的側面に対する居住歴と住居観の関連

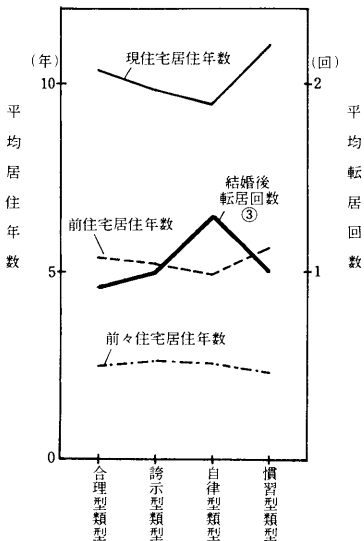
住宅の質的側面として、本項では住宅の所有関係、住宅形式、住宅様式をとりあげ、住居観パターンとの関連を検討する。

(1) 住宅の所有関係



○内の数字は平均値の差の検定による有意差(%)

図7 住居観類型と転居回数・居住年数の関連(妻)



○内の数字は平均値の差の検定による有意差(%)

図8 住居観類型と転居回数・居住年数の関連(夫)

実家の所有関係と住居観パターンとの関連を図9に示す。全体的に、妻・夫ともに持家の比率が8割を越えている。住居観パターン別にみると、 χ^2 検定

に10%水準までの有意差はみられないが、「自律型類型」の妻・夫ともに持家の割合がやや少ない傾向がある。

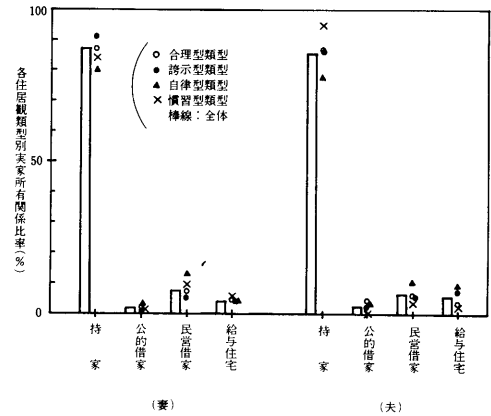
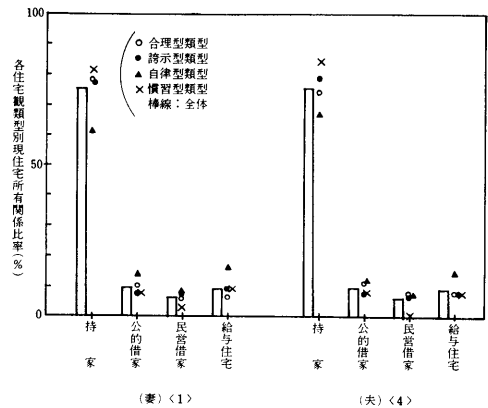


図9 妻・夫別住居観類型と実家の所有関係の関連



< >内の数字は χ^2 検定による有意差(%)

図10 妻・夫別住居観類型と現住宅の所有関係の関連

現住宅の所有関係と住居観パターンの関連を図10に示す。「自律型類型」の妻・夫ともに持家の割合が少なく、給与住宅や公的借家の割合が多い(χ^2 検定は、妻で1%、夫で5%水準で有意差あり)。この傾向も妻の方により顕著であり、実家の場合よりも顕著である。また、「慣習型類型」では、妻・夫ともに持家の比率が他パターンよりやや多くなっている。

結婚前・後の各住宅の所有関係に対する居住経験の有無の4分類と住居観パターンの関連を、図11、12に示す。持家の居住経験では、「自律型類型」の妻・夫ともに、「前後ともなし」の割合が多く、「前後と

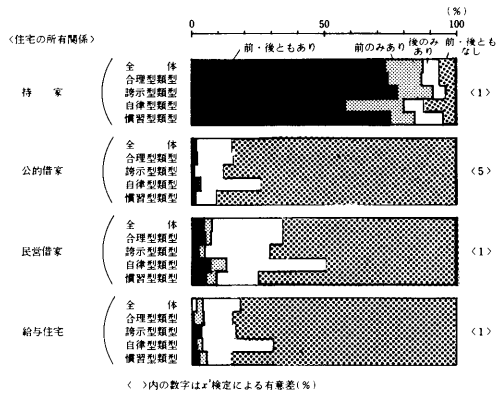


図11 住宅観類型と結婚前・後の住宅の所有関係に対する経験の関連（妻）

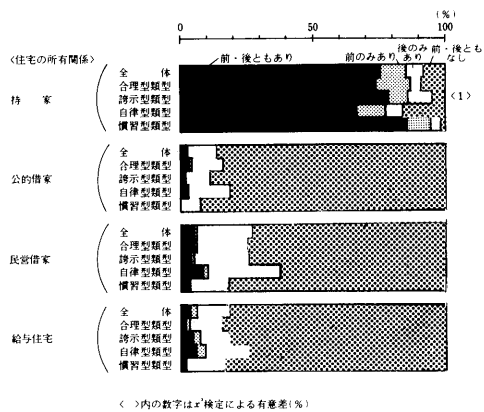


図12 住居観類型と結婚前・後の住宅の所有関係に対する経験の関連（夫）

もあり」の割合が少ない。また、「慣習型類型」の夫では、逆に「前後ともあり」の割合が多く「前後ともなし」の割合は少ない（ χ^2 検定は、妻・夫ともに1%水準で有意差あり）。公的借家、民営借家、給与住宅の居住経験では、「自律型類型」の妻・夫ともに「後のみあり」の割合が多く、「前後ともなし」の割合が少ない（ χ^2 検定は、妻で各々5%、1%、1%水準で有意差あり）。各所有関係に対する「自律型類型」の前述の傾向は、いずれも妻の方により顕著に現われている。

(2)住宅形式

実家の住宅形式と住居観パターンの関連を図13に示す。妻・夫ともに、一戸建住宅が約9割を占めている。住居観パターン別にみると、「自律型類型」の妻・夫ともに、一戸建の割合が他パターンより少なく、「慣習型類型」の夫では、一戸建の割合が他パ

ーンより多くなっている（妻・夫ともに χ^2 検定10%水準で有意差あり）。

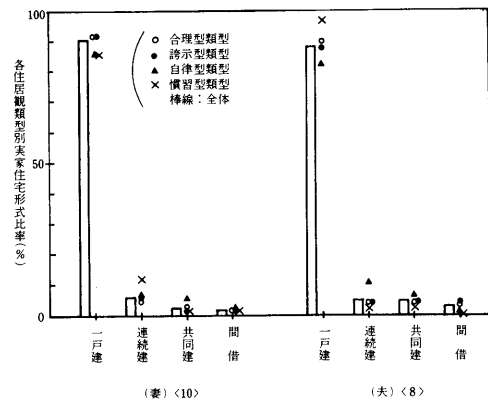


図13 妻・夫別住居観類型と実家の住宅形式の関連

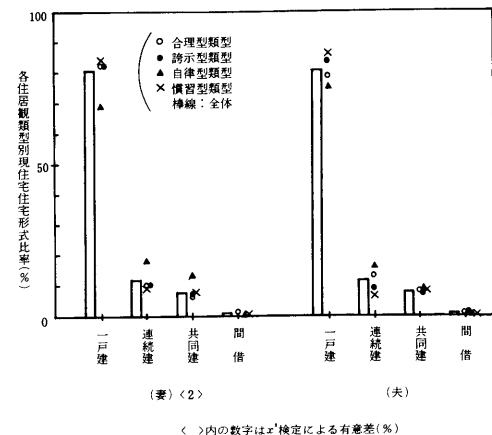


図14 妻・夫別住居観類型と現住宅の住宅形式の関連

次に、現住宅の住宅形式と住居観パターンの関連を図14に示す。「自律型類型」の妻・夫ともに、一戸建の割合が他パターンより少ないが、この傾向は妻においてより顕著である（妻で χ^2 検定5%水準で有意差あり）。

結婚前・後の各住宅形式に対する居住経験の有無の4分類と住居観パターンの関連を、図15、16に示す。一戸建住宅の居住経験では、「自律型類型」の妻・夫ともに、「前後ともあり」の割合が他パターンより少なく、「慣習型類型」の夫では「前後ともあり」の割合がやや多い（妻・夫ともに χ^2 検定5%水準で有意差あり）。連続建住宅、共同建住宅の居住経験では、「自律型類型」の妻・夫ともに、「前後ともなし」の

割合が他パターンより小さく、「後のみあり」の割合が多いが、この傾向も妻においてより顕著である。また、「慣習型類型」の夫で、連続建住宅の居住経験に「前後ともなし」の割合が他パターンより多い (χ^2 検定は、連続建住宅で妻・夫各々 1%と 5%水準で有意差あり、共同建住宅では妻に 1%水準で有意差あり)。

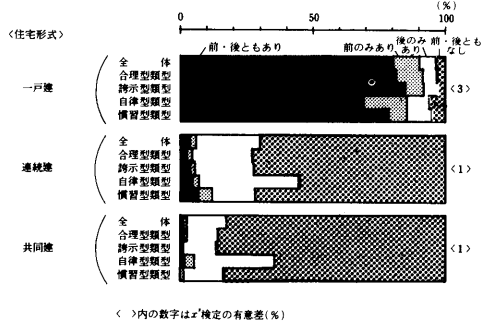


図 15 住宅観類型と結婚前・後の住宅形式に対する経験の関連 (妻)

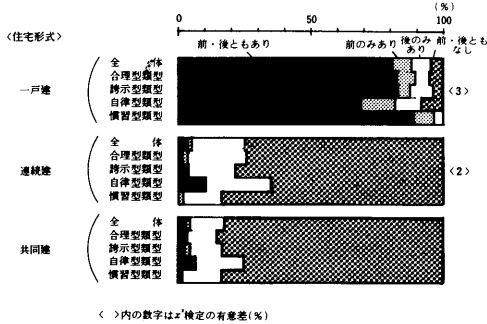


図 16 住居観類型と結婚前・後の住宅形式に対する経験の関連 (夫)

(3) 住宅様式

実家の住宅様式と住居観パターンの関連を図17に示す。「自律型類型」の妻・夫ともに専用住宅の割合が多く、農・漁家の割合は少ない。逆に、「合理型類型」の妻・夫ともに農・漁家が多く、専用住宅が少ない傾向がある。「慣習型類型」では、専用住宅の割合が多く、夫ではさらに店舗併用住宅の割合も多いが、農・漁家の割合は少ない (χ^2 検定は夫では 5%水準で有意差あり)。この傾向は「自律型類型」では妻で、「合理型類型」と「慣習型類型」では夫でより顕著に現われている。

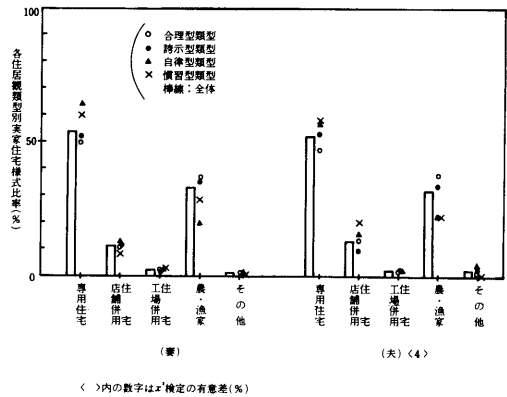


図 17 妻・夫別住居観類型と実家の住宅様式の関連

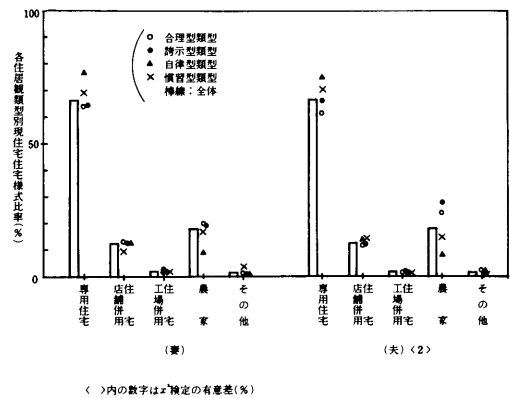


図 18 妻・夫別住居観類型と現住宅の住宅様式の関連

次に、現住宅の住宅様式と住居観パターンの関連を図18に示す。全体的に、実家より専用住宅の割合が多く、農・漁家の割合は少ない。「自律型類型」の妻・夫ともに専用住宅の割合が他パターンより多く、農家の割合は少ない。逆に、「合理型類型」では妻・夫ともに農家の割合が多く、専用住宅の割合は少ない。「合理型類型」のこの傾向は夫でより顕著である (χ^2 検定は夫に 5%水準で有意差あり)。

結婚前・後の住宅様式に対する居住経験の有無の4分類と住居観パターンの関連を、図19、20に示す。専用住宅の居住経験では、「自律型類型」の妻で「前後ともなし」の割合が少なく「前後ともあり」の割合が多い (χ^2 検定は妻に 5%水準で有意差あり)。農家に対する居住経験は、「自律型類型」の妻・夫ともに、「前後ともなし」の割合が多く「前後ともあり」の割合は少ない。また、「慣習型類型」の夫では、「前後ともなし」の割合が多くなっている (χ^2 検定は妻・夫ともに 5%水準で有意差あり)。

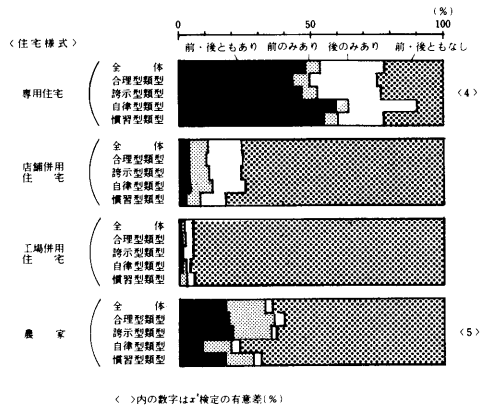


図19 住居観類型と結婚前・後の住宅様式に対する経験の関連(妻)

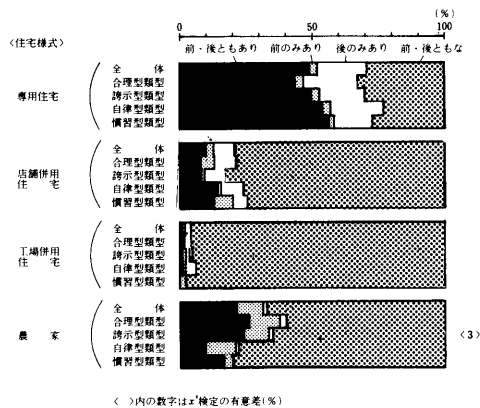


図20 住居観類型と結婚前・後の住宅様式に対する経験の関連(夫)

3) 住宅の面積的規模の側面に対する居住歴と住居観の関連

住宅の面積的規模の側面として、住宅の延床面積と部屋数をとりあげる。住居観パターン別の実家の延床面積の累積比率を図21に示す。「誇示型類型」と「慣習型類型」の妻・夫ともに住宅の延床面積は広い傾向を示し、「自律型類型」では、妻・夫ともに狭い傾向がみられ、妻の「合理型類型」でも同様である(χ^2 検定は妻・夫ともに10%水準で有意差あり)。

現住宅の延床面積と住居観パターンの関連を図22に示す。妻・夫に共通して「誇示型類型」と「慣習型類型」で広い傾向を示し、「自律型類型」と「合理型類型」では狭い傾向を示す(χ^2 検定は、妻・夫各々1%と5%水準で有意差あり)。

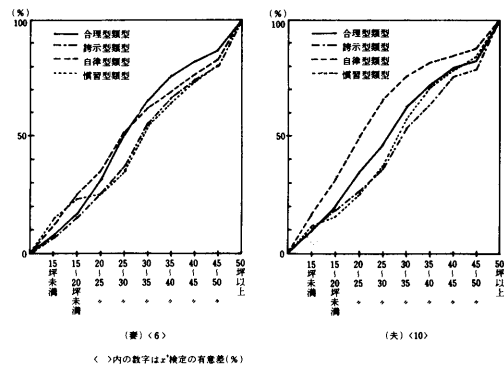


図21 妻・夫別住居観類型別実家の延床面積の累積比率

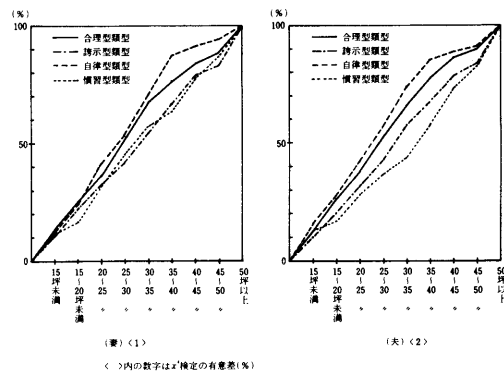


図22 妻・夫別住居観類型別現住宅の延床面積の累積比率

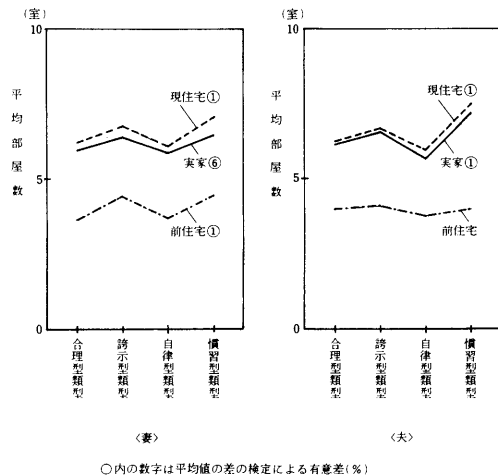


図23 妻・夫別住居観類型と平均部屋数の関連

次に、実家、現住宅、前住宅の平均部屋数を住居観パターン別に、図23に示す。「自律型類型」と「合理型類型」の妻・夫ともに、実家、現住宅の部屋数が少なく、妻では前住宅についても同傾向がみられる。また、「慣習型類型」と「誇示型類型」では多い傾向を示す（平均値の差の検定は、実家、現住宅、前住宅について、妻では10%、1%、1%で有意差があり、夫では、前2者について各々1%水準で有意差あり）。

4. 結 論

農業地、市街地（住宅地、商業地、工業地の各用途地域）に居住する小・中学生をもつ妻と夫を対象に、居住歴と住居観パターンの関連を検討した結果、次の諸点が明らかになった。

1)、住居観パターン別に、その居住歴の特徴をみると、「合理型類型」では、農漁業地居住、農家居住の経験と、住戸規模も相対的に小さい住宅の居住経験が、住宅に対する無関心傾向の強いこのパターンに影響を与えている。

「誇示型類型」では、居住歴による影響はあまり明確に現われていないが、住宅規模の大きい住宅における居住経験がこのパターンを規定している。

「自律型類型」では、住宅地域居住、専用住宅居住の経験と、出身地からの移動距離が大きく、結婚後の居住地への定着性も弱いことがこのパターンを形成する影響要因になっており、その結果持家や一戸建住宅居住経験も相対的に少なく、住宅規模も小さいものとなっている。

「慣習型類型」では、夫と妻で結婚前の居住歴は異なった傾向を示している。夫では、結婚前後とも農業地居住の経験が多く、居住地域への定着性も強く、持家の一戸建住宅で住宅規模も大きい住宅に居住したことがこのパターンの形成要因になっている。妻では、結婚後は夫の同パターンの居住歴と同傾向を示すが、結婚前は、住宅地の専用住宅居住の経験がやや多く、一戸建住宅の居住経験も少ない傾向があるが、居住地域への定着性の強さや、住戸規模が大きい点では夫の同パターンと共通しており、これが影響要因になっていると考えられる。

2)、居住歴と住居観パターンとの関連性の強弱について、妻と夫の差異をみると、「自律型類型」では、居住地の用途地域性格、結婚後の居住地域への定着性、住宅の質的各側面において、その規制力は妻の方が大になっている。「慣習型類型」では、居住地域への定着性や住宅の質的側面、住宅規模のいずれ

においても夫に対する規制力の方が大きくなっている。また、「合理型類型」では、居住地の用途地域性格や住宅様式などの農業と関係する側面で、夫に対する規制力の方が大きくなっている。

3)、結婚前と結婚後の居住経験が各住居観パターンに与える影響について、その影響度の強弱をみると、居住地の用途地域性格、住宅の所有関係の側面では、現住宅による影響の方が大きく、さらに妻では住宅形式や住戸規模でも現住宅による影響の方が大きい傾向を示している。夫では住宅形式の側面では実家による影響の方が大きい。

ただ、住宅の所有関係の持家、住宅形式の一戸建住宅では実家の影響が強く、借家や連続建、共同建住宅の場合は結婚後の影響が強くなっている。これは、実家の場合、一戸建と持家の比率が圧倒的に多いことによっていえると考えられる。

4)、居住経験の諸側面における住居観パターンへの影響度の差異をみると、居住地域の用途地域性格よりも、居住地域への定着性の強弱の方により影響度が大きく現われており、同様に、用途地域性格よりも住宅様式でとらえた場合に、住居観パターンの差異はよく現われている。

以上、住居観パターンと居住歴の関連について、その関連性の特徴をとらえ、住居観が居住歴によって影響を受けて、形成あるいは変容することを確認した。今後、さらに個別住意見と居住歴との関連について検討し、上記の関連性を裏付けたい。